

健全多収の基礎・初期生育

指導部顧問 松浦 一 宇

IT産業はじめ、世の中の移り変わりも一段と加速しているように感じられる。

農業も然り、圃場整備による大型圃場、担い手への利用集積の推進による大規模経営体の増加などによりイネづくりも、省力化や設備投資の抑制等避けられない状況が発生しているようである。

昨今、前述の対応方法として、直播栽培や密苗栽培、疎植栽培等、経営体毎に栽培方法は多様化しているが、目的は一つで「収量・品質を落とさず、いかに所得に結びつけるか」である。

健苗の定義

水苗代、保温折衷苗代、畑苗等で育てた5〜5.5葉齢の成苗を手植えしていた時代の健苗（写真1）のように、すでに分けつが1

〜2本発生している、太くてガツシリとした苗を手植えしていた時代から急転して、箱苗（健苗・写真2）の機械移植に変わった。「成苗の手植えから箱苗の機械移植」への激変を体験した。

まったく未知のイネづくりに挑戦することによる不安もあった、

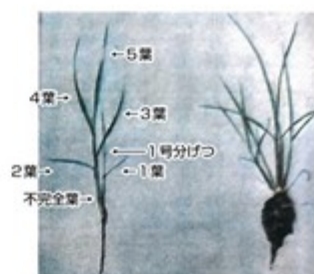


写真1. 5葉の成苗 5.7葉の超多収型の苗

指導機関やメーカー等から出される情報を頼りに、手探り状態で米づくりが数年続けた。

手植え時代に畑苗や保温折衷苗の健苗で超多収に挑戦してきた蔵父曰く「こんだ苗では10俵が関の山だ。それ以上だば獲らんね」と嘆かれた。

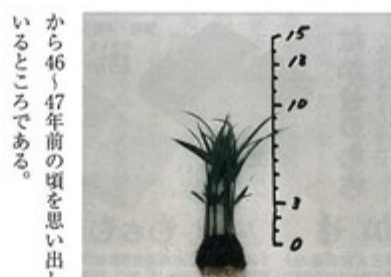


写真3. 田植機爪でかき取った苗（1株6本）

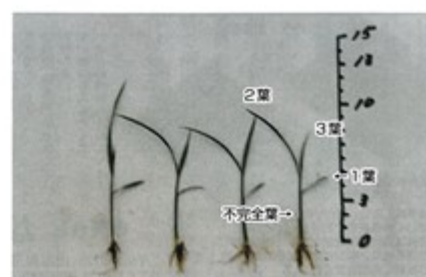


写真2. 2.5葉の箱苗（田植機時）

と、それぞれの目的に合致した最良の苗であることが重要であると思うところである。

健苗育成する上で、成苗、箱苗、密苗であれ、共通して重要なことは出芽〜2葉期頃までの「初期の適温管理」であり、写真に示したように、いずれも鞘葉、不完全葉、

本田施肥法にも工夫を

本葉第1葉・2葉が徒長しないで直立していることに注目したい。

直播栽培をはじめ、箱苗移植や密苗移植と様々である。また、特別

すでに分けつが確認される程の成苗と、田植え後15日位経過した頃からやと分けつの発生が見られる箱苗では、本田の初期生育を抜群に良くするために編み出された施肥体系（表）で、「根付け肥」「弁当肥」「活着肥」等の工夫を加えたことで、初期生育の促進拡大も出来た結果、手植え時代と遜色のない多収糧を実現できたものである。

手植えから機械移植へと移行して痛切に感じたことであるが、一口で健苗とは「この姿」と定義づけることは出来ない。

つまり、成苗での健苗の姿（写真1）、箱苗での健苗の姿（写真2）、密苗での健苗の姿（写真4）

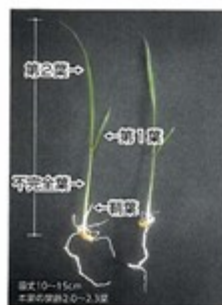


写真4. 密苗の目標とする苗姿

表. 機械植育苗の施肥体系（育苗1箱当たり）

項目	葉齢	0 (基肥)					
		15 葉期	2 葉期	2.5 葉期	3 葉期	3.5 葉期	
密苗	N (g)	1.5	1	1.5			
	P (g)	1.5	0.4	0.6			
	K (g)	1.5	0.8	1.2			
箱苗	N (g)	1.5	1	1.5	2〜3 (根付け肥) (弁当肥)		
	P (g)	1.5	0.4	0.6	0.8〜1.2		
	K (g)	1.5	0.8	1.2	1.6〜2.4		
中苗	N (g)	1.5			1 (根付け肥) (弁当肥)	1.5	移植直前
	P (g)	2.0			0.4	0.6	
	K (g)	2.0			0.8	1.2	

※根付け肥・弁当肥は水洗の必要がない液肥2号で実施しているので三要素（N・P・K）全て施用となる。

栽培（農業や化学合成肥料を慣行の半分以下）といったように多様化している。前述の栽培方法に共通して見られるのが本田初期生育が劣ることである。

箱育苗では前述したように育苗後期の施肥体系（表）に加えて、移植直後の活着肥等の対応で初期生育の促進を計ったものである。育苗様式や栽培方法が異なっても初期生育促進拡大を損ねるようでは健全多収は出来ない。

幼い苗も特別栽培も、本田初期にいかにして株元チッソ濃度を高めるかがポイントであって、早期にイネがチッソ吸収を高めるように施肥方法を工夫することの大切さは、これまでも嫌というほど体験済みである。

尚、大規模経営や労力不足で前述の手法が出来ない農家では、田植え同時施肥をする側条施肥対応も高結果に結びついている事例が多数報告されている。